

D.H.ロレンス思想と老荘思想との共鳴点に関する一試論——その1

田形みどり*1

An Examination of the Resonance between D.H.Lawrence and *Lao-tzu and Chuang-tzu*

Midori TAGATA

Abstract

There is some resonance between D.H.Lawrence's philosophy and that of *Lao-tzu* and *Chuang-tzu*. Both of them stem from Nature. D.H.Lawrence tells us that the universe is breathing and flowing just like a beating heart and that everything in Nature flows in itself. This idea resonates with the philosophy of Tao in *Lao-tzu* and *Chuang-tzu*.

1. 序

1929年に出版された詩集 *Pansies* (1929) に掲載されている詩 'Swan' は、次のような白鳥の描写で始まる。

Far-off
at the core of space
at the quick
of time
beats
and goes still
the great swan upon the waters of all endings
the swan within vast chaos, within the electron.

湖面か、あるいは川面であろうが、水面に浮かぶ白鳥を描写した詩である。静寂の中で鼓動する一羽の白鳥の存在が、ビリビリと震動となって読者に伝わってくる詩である。D.H.ロレンス (1885~1930) が水面に浮かぶ白鳥と対峙した時、その存在をどう捉えているかがよく分かる詩である。水面を吹く風、水温、太陽光の明暗、周囲の木々や植物の緑の吐息、土の香、水面下の暗い流動、雲の動き。白鳥は自然界の微妙な動きを無意識に肉体の中枢で受けとめつつ、^{しじま} 黙の孤独に浸る。孤独と言っても、非人間領域に息づく生命体であるので、精神的な孤独ではない。個

である肉体をかかえ、無心に流れる肉体存在として、充足してその孤独の中に在るということである。微動する時の流れの真只中に、ロレンスはその孤独を捉えた。それはまさに、宇宙の中枢で震動する息吹であり、電子が行きかう渾沌から生まれ出た息吹であるとロレンスは描写する。

D.H.ロレンスと老荘思想との関係は、おそらく今までほとんど論じられたことがないのではないかと推測する。少なくともそのような文献に筆者はまだ出会ったことがない。又ロレンス自身が書いたさまざまな記述の中にも Tao, Taoism, Lao-tzu, Chuang-tzu といった言葉を筆者は今まで見出したことがない。しかしながら、D.H.ロレンスが小説、詩、エッセイ、手紙を通して吐露した世界は、『老子』および『莊子 (内篇, 外篇, 雑篇)』で語られている世界と、いくつかの点で共鳴するのである。

『老子』は『道德経』とも呼ばれているが、最初にヨーロッパに紹介されたのは 1788年であり、ラテン語の翻訳でイギリスにもたらされた。その後1844年にはフランス語とドイツ語による『老子』の翻訳が出版されていた。1816年、ヘーゲルがハイデルベルグ大学での歴史哲学の講義の中で老子をとりあつかっているが、その理解は西洋哲学の伝統にもとづいた認識であり、その真髄を把握するには遠かったようだ。又ショーペンハウエルがその著書『意志と表象としての世界』(1844)の中で『老子』のフランス語訳を引用しているが、その引用文自体が他国語に翻訳する難しさを示しており適切な翻訳ではなかった。漢字を文

化言語として共有していない欧米人には、『老子』『莊子』の漢文の理解が極めて困難であることは察しがつく。象形文字であり又長い歴史を背負っている漢字は複数の意味・趣きを含み、それによって漢文は重厚な内容・趣きを放っているからである。老荘思想・禅仏教の研究者である張鍾元は「『道』の本質を知的に理解しかつ直観的に経験した哲学者は、西洋では『時と有』(1968)を著わしたハイデッガー唯一人だけである。」と述べている¹⁾。このような状況から判断すると、老荘思想はD.H.ロレンスが生存していた1930年以前の欧米においては未だその真髄は理解されていなかったと筆者は考える。

ロレンスは老荘思想に出会ったことがなかったかあるいは老荘思想にどこかで接触したことがあったかもしれないが、その接触は浅かったと判断するしかない。なぜならいくつか根本的な点で、ロレンス思想と老荘思想は深く共鳴しているので、もしロレンスが老荘思想に出会い影響を受けこれらの共鳴点に到達したとするならば、老荘思想に関するロレンスの言及がロレンスの数多くの記述に出てくるはずである。それがないということは、ロレンスが老荘思想に根本的に出会っていないと判断せざるをえない。ロレンスは生涯自然・宇宙をみつめ、その中に生存する一生命体として、それらに憧憬を抱き続けた作家であった。19世紀末、イギリスというヨーロッパ文化圏に生を受けたロレンスは、ロレンス独自の方法で自然あるいは宇宙との絆を、又自己の内部の自然・宇宙を模索したのであった。老荘思想の要も自然・宇宙である。自然・宇宙を中軸にその生涯を廻った者から発せられる言葉が、奇しくも共鳴するということはあることである。

老荘思想の中核には、「道」・「無」・「一」で表わされている自然観・宇宙観がある。まずはこれらにおける共鳴点に関して探ってみたい。

2. 「玄」

5000字からなる『老子』は、「道」を語ることから始まる。しかしながらまず冒頭で「道」は、言葉では表現しつくせない不立文字の宇宙であることが述べられている。いかなる表現、描写を試みようともそれは「道」の片鱗を一瞬垣間見せるだけである。実際は名付けようがないのであるが、語る方便として「道」・「無」・「一」と表している。

道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず。無名は天地の始めにして、有名は万物の母なり。故に常に無欲にして以て其の妙を觀、常に有欲にして以て其の微を觀。此の両者は同出にして名を異にするも、同じく之を玄と謂う。玄の又玄。衆妙の門なり²⁾。

萬物が生じる天地のはじめ、それは名付けようのないものであるが、人は常に「道」の無欲を守っていれば、(無

名の「道」が有名の天地万物を生ずるという) 始生の微妙を觀、欲望の世界に終始していれば、(現象的な) 萬物の結末を觀るにとどまるという。又この妙と微は名を異にするが、同じところから出ており、同じところを玄という。玄の又玄、それはあらゆる造化の妙が出る門であるという³⁾。『大字典』(講談社、1965)によると、妙は「年弱くして、織く美しきこと。故に少と女を合す。一説眇と同義にて、一目の少なきこと。轉じて微少の義となり、更に轉じて神妙不可思議の義とす。」である。ここでは造化の妙の意味で使われており、天地自然界に生ずる造化の妙と解せる。微は「メグルこと。故に彳扁。𠂔(クヤ)は音符」であり、末端を意味し、ここでは現象的な結末と解せる。玄は「黒くして赤色を帯び幽遠なる色のこと。玄は幽にてカスカにして微妙なる義。一は覆ふ義。幽なるものを覆へば更に幽にして暗くなる也。之を天の色とす。轉じて上帝・心眞理・幽遠・黒色・静深等の義。」とある。玄の又玄とは、闇なる渾沌のさらに深奥なる闇である。

『老子』は、その冒頭から老子の宇宙観を語っているが、59の漢字と12の句読点から成るこのわずか2行ほどの部分で、既にD.H.ロレンスが模索しその文学の中で表わした世界と深く共鳴するのである。まず「玄」であるが、ロレンスの言葉にすればdarknessである。darknessはロレンス文学が立脚している基盤である。19世紀末イギリス中部に生を受け、母親はメソジスト派の敬虔なキリスト教徒であった。夕方酔っぱらって帰ってくる炭鉱夫の父親を尻目に、子供たちは母親の知的な精神的な世界の中で育った。青春を迎え、D.H.ロレンスはその精神主義的な自己に苦しむ。それは常に微光を発し、自意識を覚醒させ、知的認識を強要する。1913年に手紙の中で「われわれはあまりにも滑稽に精神化しているので、われわれが何ものであるかを決して知らない。……そしてわれわれの意識が照らし出す事物しか存在しないものと考えなのだ。」と書いている。青春期ロレンスは正体の知れない苦悩が内部から突き上げてくるのを感じる。それは意識では捉えられない闇であり即ち肉体であった。ロレンスは肉体存在であるということのとてつもない悟ったのである。キリスト教文化圏では精神が肉体よりも上位に位置づけられ、肉体は卑しき野蛮なものとして退けられてきた。觀念化し形骸化した精神は青年に重圧を加えた。若きロレンスは「われわれは頭脳では間違いを起こすことがありえる。しかしわれわれの血が感じ、信じ、言うことは、常に真実なのだ。」と手紙に書き送った⁴⁾。人間を精神と肉体という二元論でとらえるならば肉体は自然に属する。何十億年もの生命の流れを土台にして生まれ出た一個の肉体。それは意識では捉えられない渾沌とした深奥の闇に包まれている。ロレンスは生命のこの根源をdarknessと表わしている。そのdarknessはとてつもない計り知れない闇である。『莊子』に「夫れ昭昭は冥冥より生じ、^{かたち}倫有るものは形無きものより生じ、精神は道より生ず。形は本と精より生じ、万物は形

を以て相生ず。」とある⁵⁾。昭昭は明らかなものである。即ち、すべて明らかなものは暗い根源から生まれ、又すべて法則をそなえた現象は無形のうちから生まれ、霊妙な心の働きは道から生まれると述べている。『莊子』には又「冥に枢有り。始めに彼有り。」という文もある。暗く見きわめがたいところに真理の中心があり、その真理は遠い天地の始めから存在するものであるということである。このように老荘思想では、萬物の根源を人知では計り知れない闇として「玄」とか「冥」で表わす。「玄」「冥」とロレンスのdarknessは深く共鳴する。どちらも人知では計り知れない闇である。

3. 「無」

莊子の妻が死んだ時、莊子は盆をたたいて歌った。老荘思想では、死を「大帰」ととる。「道」への壮大なる帰郷である。忌むことではない。妻はもともと形さえなかった。天地渾沌の変化の中に気が生じ、気が変化して死へと帰ってゆく。これは春夏秋冬の巡りと同じである。莊子は天地という巨室で眠りにつこうとしている妻の死を悲しむのを止めた⁶⁾。「生は塵垢なり。死生は昼夜為り。」生命は塵や垢と同じであり、生と死の移りゆきは昼と夜に同じである⁷⁾。つきることのない生と死の循環であるからこそ、萬物の根源たりえるのである。老荘思想では、「有」の根源を「道」と表わし、また「無」とも表わす。死は臭腐として嫌われるが、死も化して香しい生となる。老荘思想では、生と死に差別をつけず生も死も、等しい自然の摂理(命)とする。『老子』に「反は道の動なり。弱は道の用なり。天下の萬物は有より生じ、有は無より生ず。」とある⁸⁾。反は「復る」である。用は「作用」である。常に根源に復るのが「道」の運動であり、柔弱であるのは「道」の作用である。萬物は「有」より生じ、「有」は「無」より生ずる。老荘思想では死とは「無」に返ることである。生物は死を迎え、やがて微粒子・液体・気体となり姿を消していく。無生物も同じである。肉眼ではとらえられない状態、「無」に帰してゆく。

老子と莊子の生存年代に関しては、老子については、実存していたかどうかは確証されておらず、紀元前4世紀頃の人物ではないかと推定されている。又、莊子は紀元前300年を中心とする戦国時代中期に活動していたと推定され、『莊子』全篇は前漢の初めごろまでのほぼ150年間にわたる莊子学派の著作の集積とみられる⁹⁾。老子・莊子の時代には、生物が死に物が朽ちやがて肉眼では捉えられない状態になり姿を消していく時、現象的には、無になるとしかとらえられなかったであろう。肉眼では捉えられない原子、分子の存在が実証されたのは19世紀後半である。しかし、老荘思想では有なるものが朽ちて無に帰してゆく時、^{ゼロ}0になるとは捉えなかった。目に見えない無に帰するとは渾沌に帰することであり、母なる自然に返ることである。

即ち老荘思想では、無は^{ゼロ}0ではなく、有を生み出す母体、根源である。彼らは直感により無に帰していくことが、渾沌に帰することであることを捉えたのであろう。『大字典』によると無の象形は「古文に示す如く大・廿・廿・林の合字。廿は多数を示す。木が大に繁茂する義。(蕪は雑草繁茂の義)。後世には亡に通じ、ナシと訓じ本義は忘るる。」とある。この解説によれば、無は現代「ナシ」の意味で使われているが、もともと無の象形は木が大に繁茂している状態である。「亡」と「繁茂」という真逆の状態が一体となった漢字である。しかし老荘思想においては、「亡」は「繁茂」である。死し、朽ち、腐食し、無に帰してゆくこと、それは繁茂する自然界・宇宙へ返ることである。従って老荘思想では、自然界・宇宙を語る形象のひとつとして「無」という字を使う。有なるものが朽ちて「無」に帰する一方、同様に「無」からは有なるものが生み出されているのである。「天下の萬物は有より生じ、有は無より生ず。」

D.H.ロレンスは1917年5月から8月に渡って4回イングリッシュ・レビュー誌に‘The Reality of Peace’というタイトルのエッセイを連載した。その中では生と死が語られており、生が死とともにあることがくりかえし強調されている。秋冬の破壊、分散、崩壊、腐食、死を経過し春、生は芽生えるのである。生は、死を土壌にして発芽し、成長し、開花する。秋の腐食は春の萌芽と均衡を保っているものであり、互いに不可欠なものであり、腐食と萌芽は宇宙という心臓が行っている収縮と拡張である。一般的に崩壊と腐敗は嫌われ遠ざけられるが、ロレンスは創造と腐敗両方を受け入れ、人は安んじなければならないと語る¹⁰⁾。崩壊・腐敗は合理主義社会ではその非生産性により嫌悪され、恐怖の対象となり、排除される。しかし老荘思想もD.H.ロレンスも、腐敗や死を生と同様に受け入れている。ロレンスは「われわれは光(light)と美德(virtue)だけの生きものではない。腐敗(corruption)と死(death)の中でも生きているのだ。」と述べている。この点でもロレンス思想は老荘思想と深く共鳴するのである。生と死を等しく受け入れるところに、萬物をすべて等しく、相対的に捉える老荘思想の根本がある。又、ロレンスは「生きることによって死は満たされ(fulfillment)、死によって生は生み出され成立する。ここに、生の成就があるのであり、地上の天の園(the heaven on earth)が開花するのだ。」と述べている。地上の天の園とは、例えば開花するバラである。「肉体からは創造(creation)の流れとともに腐敗、破滅の流れも流れ出ているのであり、肉体はその双方の流れの中に存在する。知性(knowledge)はこの両方の流れの中に築かれていかなければならない。」とロレンスは述べる。死が生と共にありそして生が死と共にあることは、感性(sense)と知性(mind)と魂(spirit)総体で理解(understand)されなければならないことであるとロレンスは語る¹¹⁾。感性・知性・魂の総体で理解する

とは、理性によって単に認識するのではなく、肉体と知性の総体で直感的に悟ることである。

『莊子』知北遊篇に「生や死の徒なり。死や生の始めなり。」とある。人が生きているということは、生命を構成している気が集合しているということであり、気が離散すれば死となる。「故に万物は一なり。是れ其の美とする所の者は、神奇^{しんき}為り。其の悪む所の者は臭腐^{くふ}為り。臭腐は復化^{また}して神奇と為り神奇は復化して臭腐と為る¹²⁾。」神奇は人が美しいとして喜ぶものである。人が美しいとして喜ぶ生はやがて臭腐となる。人々は臭腐を憎むが、その臭腐は時を経過し、また美しい生を育む。このように生・死の循環を説き、すべてが「一」に還元されることを説く。老莊思想では、この「一」つまり「道」を貴び、身に修めた者が聖徳の人とされる。儒教では人格上の善悪が徳の有無を決定する。言い換えれば仁・義・礼・知・信という人格的特質を持っているかどうかで徳の有無を決定する。しかし老莊思想では「道」を身につけているかどうかで徳の有無を決定する。即ち死・生の循環である「道」を受け入れその中で生きているかどうかで徳の有無につながるのである。

‘Reality of Peace’の中に次の一文がある。

……all things that emerge pure in being from the matrix of chaos are roses of pure understanding; in them death and life are adjusted, darkness is in perfect equilibrium with light¹³⁾.

この pure understanding は生と死がひとつとなり成就すること (consummating) である。つまり理性的思考による理解ではなく、生と死をそのまま無意識に肉体で受け入れていることである。例えばヘビやハトにも備わっている、肉体が抱えている生・死の理解といったものである。渾沌から生まれ出るすべてのものは、生と死を身に収めたバラであり、それらの中においては、生と死が適合し、闇と光が均衡を保つ。ロレンスが語るこの理解 (understanding) はまさに老莊思想の「徳」と共鳴する。

バラは渾沌から生じ、発芽し、根を張り、幹を伸ばし、葉を繁らせ、花を咲かせ、花を散らす。この流れの中でいく度も瑞々しい生命を輝かせ又幾たびも翳らす。この生は常に死とともにある。やがて枯れ死してもその流れは止まることなく、肉眼では見えぬ無となり、渾沌という大きな流れに帰してゆく。バラという植物だけではなく、渾沌から生じたすべてのものが生・死の循環を流れているのであり、その循環をかかえて生きること、それがロレンスが語る理解 (understanding) であるようだ。循環する肉体を抱え、その生を、言い換えればその有なる存在を、淡々と流れていく無心さといったものをロレンスは、ここで理解 (understanding) という言葉で表わしている。その無心さをロレンスは、ヘビやハトという自然界に見い出してい

るのである。

老莊思想においても、聖人は「無」・「一」・「道」といったものを体得した徳人であるが、その徳をも意識しない、無心の、無為自然に身をまかせた者を老莊思想では聖人と呼ぶ¹⁴⁾。『莊子』の注において晋の郭象は「生にあっては生に満足し、死にあっては死に安んずる。これが莊子の本旨にほかならない。」と書いている¹⁵⁾。‘The Reality of Peace’の中でロレンスは、平安 (peace) について語っているが、その平安をもたらす要素のひとつは、生と死を共に受け入れることによって生ずるのである。すべてのものは土から生まれて土にもどる。「生死は命なり」という「道」を受け入れるこの老莊思想の姿勢は、ロレンスの理解 (understanding) と同じである。

4. 「道」

老莊思想の根幹をなすのは、なんといっても「道」である。『老子』には次のような「道」の描写がある。

そもそも「道」という存在は、まったく、ぼんやりとおぼろげである。しかし、おぼろげでぼんやりしているが、その中に何やら象 (かたち) がある。ぼんやりとおぼろげではあるが、その中に何やら物がある。奥深くほの暗いが、その中に何やらはたらきがある。そのはたらきはすこぶる純粹であって、しかもその中に確かさがある。現在から古に遡って考えると、そこには常に「道」とよばれる存在があり、万物の生ずる始めを司っていた。どうして吾人に、万物の始めが、むかしからそのようであることがわかるのか。それは「道」の恒久不変であることによってである¹⁶⁾。

混然としていて五感では捉えようもないが、規則正しく周行し続け天地万物を生み出している。それは言葉では表現し切れないものであり、仮に「道」と名付けられた。『莊子』には次のように書かれている。

それ自体すべての存在の本源とも根拠ともなるもので、天地がまだ存在しない昔からしてもとも存在し、鬼神や上帝を靈妙にし、天や地を生み出すのだ。(大空のきわみである) 太極^{たいきよく}上^{うへ}にあっても高いとはいえず、この世界の下にあっても深いとはいえず、大昔から存在しつづけていても古びたとはいえない。(昔の帝王である) 伏羲氏はこの道を身につけたことによって天と地とを合わせ整え、伏羲氏はこの道を身につけたことによって生成の大気の中に入りこんだ。北斗星はこの道を得たことにより永遠に狂いのない標準となり、日月はこの道を得たことによって永遠に輝いてやまず、堪杯^{たんぱい}はこの道を得たことによって崑崙^{こんろん}の山に入 (つて神とな) り、馮夷^{ふうい}はこの道を得たことによって黄河に遊ぶ (神となり)、肩吾はこの道を得たことによ

流れる流れであり、有^う為^いが届かない自然である。「道は常に無為にして、而も為さざるはなし。……（省略）……萬物は將に自ずから化せんとす²³⁾。」老莊思想においても、一輪の雛菊は、無から生まれ出て自ずと然りという流れを流れまた無へと返ってゆく。雛菊はその肉体の流れに終始する。又「道」のはたらきは常に無為であるが、それでいて万事を為しとげるのである。そして万物は自ずと然り流れていく。『莊子』の中に次のような問答がある。

「道というものは、どこにあるのかね」

莊子は答えた。

「どこだって、ないところは一つもないよ」

「もう少しどこそこにあると限定できないものかね」

「道は螻や蟻にだってあるよ」

「ひどく下等なものにもあるのだな」

「いや、のびえや稗^{ひえ}にだってあるよ」

「いよいよ下等になってきたものだな」

「いや、屋根瓦や敷き瓦にだってあるよ」

「下等も底なしになってきたよ」

「それどころか大便や小便にだってあるさ」

……（省略）……

「……（省略）…… 道があまねく存在することを表わすことばとしては、周^{あまね}し、偏^{あまね}し、咸^{みな}の三つがあるが、その表現はちがっていても内容は同じで、道が普遍性をもつことを意味している点では一つだ。それほど、道にとっては普遍性ということがたいせつなのだよ²⁴⁾。」

老莊思想では存在するあらゆるものに「道」が遍在するとする。つまり、あらゆるものがそれぞれ自ずと然りという流れを辿っているとする。「果^か蓀^らにも理あり。」果は木の実、蓀は草の実である。木の実や草の実にもそれなりの定まった条理がある。又、屋根瓦も屎尿も「道」である。萬物が変化し流れている。

‘The Reality of Peace’の中で、ロレンスも屎尿について語っている。小麦は食され、食した者の血に火を与え、分解され汗となり屎尿となり土にもどる。小麦が火となり、食した者を創造にかりたてることが名誉あること（pride）であるとしたら、どうして汗を流し屎尿を垂れることが恥すべきこと（shame）なのか。この生きた崩壊（living corruption）をわれわれの中において、誇らしくその座を占めさせようとロレンスは述べる。創造力を発揮することも、屎尿を垂れることも、共に「道」の流れの一過程である。もちろん屎尿は祭り上げられるものではなく土の中に返されるべきものであるが。老莊思想ではこれも万物斉同のひとつになる。誕生と死が等しい重さであると同様に、創造力と屎尿も等しくバランスをとる。屎尿と創造力を同次元のものとするこの姿勢は、理想と発展を求めて突走する近代合理主義思想には持ちえない姿勢である。

星久美子氏は「‘The Reality of Peace’には、直線的時

間と相対する円環的時間を自然とみなすロレンスの思考傾向が現れている。」と述べている²⁵⁾。直線的時間は、神の国を志向するユダヤキリスト教によって導入され、西欧文明に受け継がれ、常に進歩・発展を志向する上昇姿勢を構築した。常に上昇を志向する直線的时间に支えられている西洋近代文明では、崩壊・屎尿は排除される。しかし、「老子」では「反は道の動なり。」常に根源^{かえ}に復るのが「道」の運動である。老莊思想においては円還運動で自然が流れているのである。

ロレンスはすべてのものが流れていると語る。そしてすべてのものそれぞれに流れを見出す。この点でロレンス思想の flow は、老莊思想の「道」の普遍性と根本的に共鳴しているのである。

詩集 *Pansies* (1929) は、晩年に近い1928年11月から12月の短期間に生み出された詩を集め、ロレンスの直感力の鋭性感性の機敏さ思推の深さをあらためて感じさせる詩集であるが、その序文で、なぜその詩集を *Pansies* と名付けたのかが述べられている。この詩集は、ロレンスの *Pensees* つまり思惟であるという。なにげない思惟はそれが真実である時は真であるが、環境が変わり気分が変わると変化する。ロレンスはこの詩集を、植物のパンジーが流れる生命であるように、生命のはかない繊細な流れを映すものにしたと語っている。そうすることによって詩に変化するさまざまな面が映し出され、魅力を持つことになるだろうと述べている。パンジーは美しいだけではない。その香には腐食土の香りも含まれている。すじの入った花びらは、人の心を癒す表情を現わすだけではない。悪魔的表情も表わすし、青ざめた表情も浮かべる。パンジーのように、ロレンスの詩も一瞬々の吐息を表わすものでありたいとロレンスは思う。パンジーをクギ止めするなどということは不可能であるし、第一ロレンスは永遠に咲き続ける花など欲しないのである。人間も肉体を抱えさまざまなものに呼応しながら流れている。人間から生み出される思想も、絵画も、社会も、流れている。ロレンスは万象に流れを感じとったのであった。

『莊子』に次の記述がある。「六合は巨^{りくごう}（大）たるも、未だ其の内より離れず、秋豪^{しゅうごう}（毫）は小たるも、未だ其の待ちて体を成す²⁶⁾。」六合は宇宙である。秋豪は秋の獣の毛先である。宇宙は巨大だといっても「道」のはたらきの外に出ることはなく、秋の獣の毛先は微少だといっても、「道」のはたらきを借りてできている。老莊思想では宇宙から秋の獣の毛先に至るまで自ずと然りという流れ、「道」から成り立っているのだとする。

‘The Reality of Peace’で、平安（peace）とは魂のもっとも深い欲望を満たしている状態であるとロレンスは述べている。深い欲望とは、未知（unknown）から、われわれの中に流れ込んでくる大きな衝動（the greatest impulse）に従うことである。その流れは、宇宙が収縮と拡大をくりかえし心臓のように吐き出している流れでもあ

り、又自己の中に流れる自ずと然りという流れでもある。ロレンスは、未知から来たる流れと表現しているが、未知は自己の内部の darkness でもある。自己が自己を認識できるのは自己のほんの一片である。残りは darkness とロレンスが呼ぶ自然である。宇宙の流れと自己の中の流れが呼応し波立つ時、その流れに従うことによって平安は得られるのだとロレンスは述べている²⁷⁾。

森三樹三郎は「戦国時代の諸子百家は、唯一の例外である黒子を除いて、すべて無神論の基調の上に立っていたといつてよい。老子もその例外ではなかった。しかし、万能の神をもたないかわりに、天の道すなわち自然の摂理にたいする絶大な信頼があった。それは信頼というよりも、むしろ信仰に近いものである。」と述べている²⁸⁾。ロレンスも自然界に流れている流れに真の実在を感じた。例えば夏大きく繁るライムの木、そこに生命の神々しい流れを見る。ロレンスにとっては、ライムの木に流れている生命を感じるだけで十分であった²⁹⁾。未知なる流れが来たり自己の内部深くから駆り立てられる時、自己の意志を滅却しその未知の流れに従わなければならないとロレンスは述べるが、これは老荘思想の「無為自然」に近接していると筆者は考える³⁰⁾。

『莊子』に次の記述がある。「天地は大美あるも言わず。四時は明法あるも議せず。万物は成理あるも説かず。聖人なる者は天地の美に原づきて、万物の理に達す。是の故に、至人は為すなく、大聖は作さずとは、天地に観るの謂なり³¹⁾。」この部分に 道家研究家・金谷治は次のように説注をつけている。「天地自然はすぐれた（生成の）働きをとげながら、それを言葉では言わない。四季のめぐりははっきりした法則を持ちながら、それを議論したりはしない。万物はそれぞれの道理をそなえながら、それを説き明かすことはしない。聖人というものは、この天地自然のすぐれた働きを根拠として、万物の道理に通達している。だから、至人（最高の人）は作為をせず、大聖人はことさらなことはしないと（言われているのは）、天地自然を模範にとることを言ったものである。」老荘思想の根本には、この「無為自然」がある。万物が自ずと然りという流れ、つまり道を流れ大美・明法を成している。道への全幅の信頼が無為自然を成立させている。ロレンスが未知から流れ込んでくる大きな衝動に従うと述べる時、それは自己の深奥に内在する必然に従うことであり、老荘思想の無為自然と共鳴するものである。

‘The Reality of Peace’ の冒頭に次の文がある。

We are like the shuttle that flies from never to forever, from forever back to never.

「われわれは never から forever へと行きそしてまた forever から never へと再び復ってくる織機の杼のようなものである。」とロレンスは述べている。never は never

being と理解してよいであろう。つまり「無」である。われわれは「無」から出て、「無」へと復ってくる。forever という言葉は読者は注意して扱わなければならない。万物が流れていることを常に感ぜざるをえないロレンスにとって、決して変化することのない永遠というものは観念でしかない³²⁾。つまり永遠に変化しない美とか愛とか生命といったものはロレンスにとっては存在しない。又 never から生じて never に復るのであるから forever は永遠に到達することがない果てというものではありえない。むしろ ‘The Crown’ (1925) の中で timeless とロレンスが表現しているものに近い。赤いケシの花が開花する一瞬々、それは、過去と未来が衝突する一瞬 (naked moment) であり、生命の波が高まり輝きを発した一瞬である。この一瞬は時間を越えて timeless であり絶対 (absolute) であるとロレンスは語る³³⁾。この絶対は次の瞬間には変化する。しかしながら生命が高まり繊細な美しい輝きを放った一瞬であり、ひとつの成就であり、ロレンスは絶対という言葉でこの一瞬を表わしたかったのであろう。‘The Reality of Peace’ の forever はこの絶対に内容的には近いのではないかと筆者は考える。即ち、ロレンスも「われわれは、無から生じみずからの生命の流れを流れ成就し、そしてまた無にもどってくる杼のようなものである。」と述べており、老荘思想と根本的に共鳴するのである。

冒頭に引用した詩 Swan の中に the waters of all endings という言葉がある。冒頭では、あえてこの箇所は訳さなかった。ending という言葉が説明しづらかったからである。しかし、ここまで D.H.ロレンスと老荘思想との共鳴点を追って辿ってくると、ending は理解しやすい言葉となっている。all endings とは老荘思想の言葉を借りて表現すれば、「道」の末端、即ち造化である。the waters of all endings とは、造化の湖、即ち自然・宇宙である。その真只中で鼓動する生命のひとつの流れ、白鳥をロレンスは捉え描写したのであった。D.H.ロレンス思想と老荘思想とには、このようにいくつかの共鳴点がある。特にロレンス思想の flow は、老荘思想の「道」と深く共鳴する。

註

- 1) 張 鍾元, 上野浩道訳 (1987): 『老子の思想』, 講談社, pp.13-5
- 2) 森三樹三郎 (1994): 『老子・莊子』, 講談社, pp.145-7
- 3) 楠山春樹 (2002): 『「老子」を読む』, PHP 研究所, pp. 72-6
- 4) D.H.Lawrence, Aldous Huxley ed. (1932): *The Letters Of D.H.Lawrence*, Heinemann, p.94
- 5) 森三樹三郎 (2001): 『莊子II』, 中央公論新社, p.126
- 6) *ibid.* 5), pp.9-10
- 7) 金谷 治 (1982): 『莊子』第三冊, 岩波書店, pp.16-8
- 8) *ibid.* 3), p.178

- 9) 金谷 治 (1971):『莊子』第一冊, 岩波書店, p.12
- 10) D.H.Lawrence, Michael Herbert ed. (1988): 'The Reality of Peace', *Reflection on the Death of a Porcupine*, Cambridge University Press, p.36
- 11) *ibid.* 10), p.34
- 12) *ibid.* 5), pp.117-8
- 13) *ibid.* 10), p.38
- 14) *ibid.* 3), p.52
- 15) *ibid.* 2), p.253
- 16) *ibid.* 3), pp.125-7
- 17) *ibid.* 9), pp.187-90
- 18) *ibid.* 5), p.134
- 19) 釜谷武志 (2004):「二つの自然」,『世界思想』31号, 世界思想社, p.1
及川郁郎 (2000):『ナチュラリストの読んだ莊子』, 近代文芸社, p.14
- 20) 福永光司 (1964):『莊子』, 中央公論新社, p.133
- 21) *ibid.* 5), pp.126-8
- 22) D.H.Lawrence, Warren Robert and Harry T. Moore ed. (1978): 'Do Women Change?', *Phoenix II*, Penguin Books, pp.541-2
- 23) *ibid.* 3), pp.167-9
- 24) *ibid.* 5), pp.132-4
- 25) 星久美子 (2000):「『創造の流れ』,『無時間性』,『腐敗の流れ』」,『D.H.ロレンス研究』第10号, 日本ロレンス協会, pp.16-7
- 26) *ibid.* 7), pp.146-8
- 27) *ibid.* 10), p.27
- 28) *ibid.* 2), p.37
- 29) D.H.Lawrence, Vivian de Sola Pinto and F. Warren Robers ed. (1971): "What Are The Gods?", 'More Pansies', *The Complete Poems Of D.H.Lawrence*, The Viking Press, p.650
- 30) *ibid.* 10), pp.27-9, pp.45-52
- 31) *ibid.* 7), pp.146-8
- 32) *ibid.* 10), 'On Being Religious', p.190
- 33) *ibid.* 22), "The Crown", p.410

謝 辞

本稿の査読を通して、貴重な助言をくださった査読者に深く感謝いたします。

参考文献

- 小川環樹 (1973): 老子, 中央公論新社, 総頁数189
 加藤祥造 (2000): タオー老子, 筑摩書房, 総頁数232
 加藤祥造 (2003): タオにつながる, 朝日新聞社, 総頁数187
 金谷 治 (1975, 1983): 莊子 第二冊・第四冊, 岩波書店, 総頁数283・246
 河野哲二 (2004): D.H.ロレンス絵画作品集, 創元社, 総頁数403
 蜂谷邦夫 (1987): 老子を読む, 講談社, 総頁数227
 森三樹三郎 (1969): 「無」の思想, 講談社, 総頁数216
 森三樹三郎 (2001): 莊子 I, 中央公論新社, 総頁数426
 守屋 洋 (2002): 老子の人間学, プレジデント社, 総頁数236
 Lawrence D.H., Mara Kalnins ed. (1980): *Apocalypse and the Writings on Revelation*, Cambridge University Press, 249 pages
 Lawrence D.H. (1961): *A Propose of Lady Chatterley's Lover and Other Essays*, Penguin Books, 157 pages
 Lawrence D.H. (1971): *Fantasia of the Unconscious Psychoanalysis and the Unconscious*, Penguin Books, 852 pages
 Lawrence D.H. (1927): *Morning in Mexico*, Martin Secker, 178 pages
 Lawrence D.H., Edward D. McDonald ed. (1978) *Phoenix*, Penguin Books, 852 pages
 Lawrence D.H., Warren Roberts and Harry T. Moore ed. (1978) *Phoenix II*, Penguin Books, 640 pages
 Lawrence D.H., Michel Herbert ed. (1988): *Reflection on the Death of a Porcupine and Other Essays*, Cambridge University Press, 492 pages
 Lawrence D.H., Simonetta de Fillippis ed. (1992): *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays*, Cambridge University Press, 387 pages
 Lawrence D.H., Vivian de Sola Pinto and F. Warren Roberts ed. (1971): *The Complete Poems*, The Viking Press, 1078 pages
 Lawrence D.H., Aldous Huxley ed. (1932): *The Letters of D.H.Lawrence*, Heinemann, 889 pages

要 旨

D.H.ロレンス思想と老荘思想には、いくつかの共鳴点がある。共に自然界を枢軸にし生み出された思想である。D.H.ロレンスは、宇宙は心臓のように鼓動し流れを生み出しており、自然界のすべてのものがそれ自体に備わった流れを流れているのだと述べている。これは老荘思想の「道」と共鳴する。